ACE COMBAT 5 The Unsung War

KZK

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＡＣＥ　ＣＯＭＢＡＴ　５　Ｔｈｅ　Ｕｎｓｕｎｇ　Ｗａｒ

【Ｎコード】
Ｎ１３８４ＢＡ

【作者名】
ＫＺＫ

【あらすじ】
小惑星ユリシーズの飛来から数年、ユージアでのＩＳＡＦと軍事大国エルジアとの戦争より５年ほど経過した２０１０年。オーシア連邦の最西部に位置するサンド島空軍基地にユニークな男がいると聞いて取材に来ていた記者のアルベール・ジュネットは訓練中の隊長機の後部座席にて演習をカメラに納めようとしていた。しかし、突然基地管制塔より無線連絡が入る…。

プロローグ（前書き）

エースコンバットは是非映画にして欲しいゲーム作品の一つです。

今回は自分なりに物語をいじりながら投稿して行きたいと思います。

プロローグ

１５年前に戦争があった。

いや…戦争なら遥か昔から何度となくあった。

ベルカ公国と呼ばれるオーシアの北に位置するその国は、歴史上幾度となく南の土地を目指して侵攻を繰り返した。

運に恵まれぬ彼らに勝利が続くはずはない。

彼らは時代が変わったことに気付かなかった。

敗戦を繰り返しては領土を失い小国に戻りつつあった彼らは比類なき工業力を養いそれを武器に世界に向かって最後の戦いを挑んだ。

それが１５年前の戦争―。

彼らは猛々しく戦い、惨敗した。

迫りくる連合軍の侵攻を防ぐために自国の領土内で７つの戦術核を使うという愚さえ犯したベルカ人。

自らの町を蒸発させ、彼らは自らを北の地へと閉じ込めた。

その無残を目にした戦勝国たちは、自らの持つ武器を捨てようと心に誓った。

世界に平和が訪れた。
そして、それは永遠に続くものかと思われていた…。

あれから１５年後の現在。

２０１０年９月２３日、オーシア連邦、セレス海の孤島・サンド島。

平和から最も遠いこの島で平和を守って飛ぶ彼ら。

物語はここから始まる。

―――――――――――――――

”レッドアラート！！”

その時私は空中にいた。

編隊長機の後席から
演習の光景をカメラに収めようとしていた。

前席が地上に向けて吠えている。

【Ｆ－４】の狭いコックピット内、上空５０００ｍを飛行する１０機の練習機編隊。

唐突に無線が開く。

”ピピッ”
「無茶言うな。新米の面倒見てんだぜこっちは。」

《通信指令室よりウォードッグ。不明編隊のコース、ランダース岬を基点に２７８から３０２。バートレット大尉。サンド島の貴隊にしか間に合わない。》

「っち。ベイカー。スヴェンソン。後ろにつけ。教官のみで侵入機を迎える。残りは低空へ退避しろ。」

《ベイカー。了解。》

《スヴェンソン。了解。まったく・・・今日は厄日だぜ。》

「無駄口叩くな。スヴェンソン。舌噛むぞ。」

編隊は二手に別れる。

「ジュネット。悪いが付き合ってもらうぜ。キツかったら寝ちまいな。」

大尉の宣告と同時に機体が唸り声を上げる。

世界がひっくり返り。

胃が裏返った。

―――――――――――――――

「すまねぇな。」

着陸後そんな場合でもないだろうに隊長は私に謝った。

通信指令室の犯したミスのために教官1名と練習生6名が戦死、さらに教官1名が着陸時にクラッシュ、計8名が死亡した。

この人の責任ではない。国籍不明機が躊躇いなく打ってきたのは・・・。

そして交戦の最中、練習生を逃がした場所が敵の真正面だったことは・・・。

交戦終了後、無事に基地へと戻れたのはたったの2機だけだった。

「あの07の機体。あのパイロットの反撃は見事でした。」

「見てられん・・・。ナガセ。あんな飛び方したら死ぬぞ！！。」

「…死にません。」

ただひとり生き残った新米パイロット。
ケイ・ナガセ少尉はささやくようにそう言った。
短髪黒髪の彼女の表情には交戦後の疲れが見える。

「虫も殺しませんって面してやがるぜ。」

呆れ顔のバートレット大尉。
そのまま格納庫へと歩きだす。

私は自分の愛機の側に佇む彼女にカメラを向けた。

”パシャッ”

私の向けたカメラに彼女はわずかに微笑んだ。

しかし、そんの写真はカメラごと基地守備兵に取り上げられてしまった。

宣戦布告もなく行われた戦闘の証拠が拭われてゆく。

プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

誤字脱字にはできるだけ注意していきたいです。

極西の飛行隊　前（前書き）

今回はブレイズ視点です。

極西の飛行隊　前

国籍不明機との交戦から1時間後、ブリーフィングルームに練習生達が集められた。

目の前に座るのはこの基地有一の教導官となってしまったバートレット大尉。

その表情には疲れが見える。

「おいアレックス。」

俺の隣に座るアルヴィン・H・ダヴェンポート少尉、お調子者でお喋り大好きな彼が唐突に話しかけてきた。

「いつもブレイズと呼べと言ってるだろ。なんだ？ダヴェンポート少尉。」

「かぁ～相変わらず堅いね～。階級同じなんだから一々少尉なんて付けんなよ。」

堅いとは余計な話だ。

「これは癖だ。」

親父が軍属だったこともありイマイチ砕けた話し方が苦手なのだ・・・。

こればかりはしかたない。

「まぁいいけどよ。それよりどう思う？」

「何がだ?。」

「おいおい決まってんだろ。この陰気癖ぇブリーフィングについてだよ。」

まぁそんなとこだろうな。先の戦闘で戦死した者たちについてはすでに厳口令がしかれている。

遺族に何も知らせられないのは辛いことだ・・・。が我々は軍人だ。割り切らなければならない。

しかしいくら軍人と言っても俺達も人間だ。仲間を失った悲しみはどうしても胸の内から滲み出てしまう。

まぁ中には我解せずって奴らもいるが・・・。

「ふむ。おそらく次のスクランブルのメンバー編成を決める為だろうな。その証拠にここにいる連中は全員一等航空士以上の者が集まってるしな。」

「やっぱか。はぁ～ダルイねぇ～。飛ぶのは好きだが、敵さんと命がけの追いかけっこはごめんだね。」

「残りの機体数から見ると4機編隊のローテーションスケジュールになるだろうな。」

格納庫にある機体は隊長の【F－4】1機に訓練用【F－1】が4機か・・・。

「大尉を含めた計４人、成績重視でいくと俺とダヴェンポート少尉、あとは・・・。」

「あー。文句の山ほどもあろうが人手も足りん。」

先ほどまで椅子に座り上を仰いでいた大尉が急に話を始めた。

全員の視線が大尉に集まる。

「明日からは新米共もスクランブル配置だ。上では俺のそばから離さん。」

予想道理。実践経験のない俺達にもスクランブルがかかってきた。

「ナガセ。」

「はい。」

ケイ・ナガセ少尉。先の交戦での唯一の生き残り・・・。

「お前は俺の2番機だ。目をつけてねぇと何しでかすかわからん。」

大尉の言葉にナガセ少尉は顔をしかめた。

「残りの奴らについてはまずアルヴィン・H・ダヴェンポート少尉、貴様だ。操縦に遊びが見られるがその柔軟な機動は実戦で役に立つ。」

「お褒めに預かり光栄です。隊長殿。」

「ふっ。そして次に貴様だアレックス・レイ少尉。訓練下での撃墜記録並びに冷静な状況判断力から貴様を連れて行く。」

「以上が選抜メンバーだ。他の者たちは後日編成資料を配布する。ここまでで何かあるか？。」

まぁ妥当な選出だな。

「では、解散する。」

――――――――――――――――

後日、２０１０年９月２４日

ブリーフィングルーム

「諸君、楽にしたまえ・・・と言いたいところだがそうもいかん。由々しき緊急事態である。ブリーフィングを進める。」

丸々と太った中年男。我らが基地司令ことオーソン・ペロー中佐より任務概要が告げられる。

『オーシア連邦領空に再び国籍不明機が侵入した。国籍不明機は警

告したにもかかわらず領空侵犯を続行したため、オーシア海岸警備隊がＳＡＭを既に発射した。ミサイルは国籍不明機に命中したが、撃墜には至ってない。被弾した機は一転洋上への離脱を目指し、高度を下げつつも依然として飛行中である。国籍不明機を捕捉し正体を解明するため、地上へ強制着陸させよ。なお、許可あるまで発砲は禁ずる。』

――――――――――――――――

ブリーフィング終了後パイロットスーツに着替えた俺は廊下で偶然ナガセ少尉とであった。

「確かケイ・ナガセ少尉だったな。俺はアレックス・レイ。階級は少尉。コールサインは”ブレイズ”だ。ブレイズと呼んでくれ。」

「ブレイズ・・・。私のことはご存じの様ね。」

「いや。知っているのは名前と階級、そして練習生唯一の実戦経験者と言うことだけだ。」

「そう。なら一応こちらも自己紹介しておくわ。ケイ・ナガセ少尉、コールサインは”エッジ”よろしくね。」

「ああ、此方こそよろしく。」

俺達は互いに握手した。自分で言うのもなんだが悠長なことである。

「では急ごう。ナガセ少尉、大尉より先にいかなければ・・・。後が怖い。」

「ええ。」

そして俺達はその後の会話もなく格納庫へと足を進めた。

ちなみに格納庫にはすでに大尉の姿があり、軽いお叱りを受けてしまった。

その後ダヴェンポート少尉とのくじ引きで俺は編隊の４番機となった。

極西の飛行隊　前（後書き）

自分の中でのブレイズはお堅い感じです。
皆さんはどうですか？

極西の飛行隊　後（前書き）

今回はチョッパー視点です。

極西の飛行隊　後

天候は快晴。青空の下を４機の機影が通り過ぎる。
【Ｆ－４Ｅ】の後ろを【Ｆ－５Ｅ】３機が追順して飛ぶ。上から見るときれいなひし形を描いているはずだ。

現在時刻は午前１１時０１分。

《こちらウォードッグ、”ハートブレイク・ワン”。これより目標に接敵する。》

隊長機からの無線連絡に対し空中管制機からの返信が来る。

《こちら空中管制機”サンダーヘッド”了解。強制着陸させよ。ウォードッグ各機発砲は禁ずる。繰り返す発砲は禁ずる。》

発砲は禁ずるねぇ。仲良く敵さんと遊覧飛行ってか?。そいつは愉快な話だな。
機体制御に専念しながらオレそんなことを思っていた。

《聞いたな、ひよっこども》

《2番機、了解。》

おっといけね。

「3番機、了解。」

《・・・4番!どん尻、おい、聞こえてるか、”ブービー”?。ち

ゃんとついて来てるか？最後尾！》

《・・・４番機、了解。》

《返事だけは一人前だな、離されるな。》

あーあー。ブービーだって。

こりゃ傑作だ。

「やれやれ、俺ぁ今回クジに勝って3番機でよかったぜ。」

《黙れ、アルヴィン・Ｈ・ダヴェンポート少尉。お前も何かあだ名で呼ばれたいのか？。》

おいおい変なのは御免だぜ。

「自分は呼ばれるなら”チョッパー”であります。それ以外では応答しないかもしれないであります。」

《それは実にお前らしい呼び名だが、俺は心の中ではもっと別の名でお前を呼ぶ。いいか？。》

はぁ～。

「勘弁してくれよ！。」

《お客さんだ、ゆくぞ。》

隊長機がいきなり進路を変える。レーダーには確かに不明機を捉えてるみたいだな。

隊列崩すと何言われるか分かったもんじゃねぇ。
他の連中も考えは同じらしい。隊長にピッタリくっついている。
《許可あるまで発砲は禁止する。いいか？。》
《４番機、了解。》
《よし、いい子だ。》
ブービーの奴、もう同じ轍は踏まないってか？。
確かに賢明な判断だね。
オレたちの編隊はそのまま海上へ逃れようとする国籍不明機に接近していった。
だんだん機影が見えてくる。
ってありゃブラックバードじゃねぇか！？
よくＳＡＭがあたったもんだぜ。
《おしゃべり小僧チョッパー。》
いきなりのご指名である。
「うっ。オレのあだ名はそれかい。」
まったく。小僧は余計だっつーの。
《お前は漫談の才能がある。ひとつ、降伏勧告をやってもらえんか？。》

はぁ？なんっだそれ？
メンド癖ぇ。
「どうかご自分で。」
《俺は人見知りの癖があってなぁ。》
どの口がほざきやがる。
「ちぇっ。あー、あー。国籍不明機に告ぐ。我々の誘導にしたがって進路をとれ。」
《いいぞぉ。》
へん。
「あー、最寄の飛行場へ誘導する。了解したらギアダウンしろ。」
”ピピピッ”
《警報！さらに数機の国籍不明機が接近。方位２８０、高度６０００！。高速の小型機４機！。命令あるまで発砲は禁ずる！。》
ああ！？また来たのか？？
サンダーヘッドからの無線連絡。
《海を越えて偵察機の帰還援護に来るとは、殊勝（しゅしょう）な奴らだ。それでこそ戦闘機だぜ。》
隊長はやる気のようである。

《それ、方位２８０！ヘッドオン！！。》
隊長機に合わせて俺らも機体を調整する。
４機か・・・。
《いいか、俺がいいというまで発砲はするんじゃねぇぞ。》
《２番機、了解。》
「３番機、了解。」
《４番機、了解。》
《よし、いい子だ。》
敵の機影が見えて来た。
”ビービー”
ミサイルアラート！？
「撃って来たぞ！」
急いで機体を旋回させる。どうやら誘導性はあまり高くないらしい。
機体を安定させつつ様子を伺う。
《命令あるまで発砲は禁ずる。》
はぁ！？なに言ってやがる！！？

「ふざけんな！向こうは実弾じゃねえか！戦闘機だぜ。」

《喋ってねえで降りかかる火の粉を払え。》

《了解、ブレイズ”ＦＯＸ２”！。》

おいおい！？ブービーの奴がかましやがったぞ！。

放たれたブレイズのミサイルはそのまま敵機の右翼に命中。敵はそのまま墜落していった。

《こちらサンダーヘッド。バートレット大尉それは命令違反だ！。》

アラートが鳴り響く。クッソ！ケツにつかれてる。

《阿保！これ以上部下を殺させねえんだよ。》

《エッジ、交戦！》

《ブービー、全部墜とすぞ！。》

《ブレイズ、了解。》

急旋回しつつ敵機を撒く。

なんとか振り切った。

「戦果ってあげていいのか？、やっちゃうぞ、オレ。」

《やってみな。》

さてと・・・。隊長の許可も下りたし。いっちょやりますか！！。

「”ＦＯＸ２”！。」

放たれたミサイルは敵機のエンジンに命中、そのまま爆散した。

悪く思うなよ・・・。

《命令あるまで発砲は禁ずる！。》

《応戦します。》

「ヒューッ」

やるなーナガセの奴。サンダーヘッドも一発沈黙だぜ。

《敵偵察機墜落！》

《残念だな、力尽きたか・・・。》

まぁやっこさんＳＡＭ食らって煙吹いてたしな。

《逃がすな。よく狙え。》

《射撃中止！》

へいへい。しつこいなぁ。

もはやサンドーヘッドに耳を貸すものはいない。

「思い残すことがあるとすれば・・・。オレはもっとやさしい隊長

の下で飛びたかったよ。」

《ウォードッグ、発砲は禁ずると命令した。命令を守れ。》

《発砲は禁ずる。繰り返す。発砲は禁ずる。》

《1機撃破。》

ナガセの奴もやりやがったな。

［［機数4、早急に駆逐せよ。］］

敵の増援4機。
それに混線か。

《3番機、酔いどれみたいにふらついてるぞ。》

「ち、ちくしょう・・・」

こっちとら敵2機に追いかけられてんだよ。

［［ここは敵地だ。十分に注意して確実に仕留めろ。］］

おーおー容赦ねえぜ。
オレは機体のピッチを下げ海面を目指す。
手持ちのUGBを海面へ向け投下しピッチを上げた。
跳ね上がる海水に視界を遮られ、敵はそのまま海中へとダイブした。

「へへへっどんなもんよ。」

《まだ終わってねえぞ。》

どうやら1機残ってたようだ。

《ブレイズ、ＦＯＸ３》

だが残った1機もブレイズの機関銃に蜂の巣にされ、爆散した。
レーダーに敵の機影はない。

《ハートブレイク・ワンから各機へ異常はないか?。》

《4番機、異常なし。》

《2番機、異常なし。》

「3番機、問題なしだ。」

《よーし、いいぞ。》

《すべての国籍不明機の撃墜を確認。》

《みんな生きてるな。よーし、いい子ちゃんたちだ。４番機、ちゃんとついて来てるか?。よし、全員生還の今日の良き日の記念に、今後、編隊内のどこにいてもお前のことはブービーと呼ぶ、いいな、わかったな。》

「やれやれだぜ。」

こりゃブレイズの奴もさぞお疲れのご様子だな。

そんなことを考えながら俺たちの初任務は全員生還で幕を閉じた。

『中央より緊急通達命令
サンド島基地隊員各位：
１．今戦闘に関連する一切の口外を禁ずる。
２．サンド島分遣飛行隊長ジャック・バートレット大尉、基地司令部へ出頭を命ずる。
Ｓｅｐ．２４，２０１０
発令：ＥＯ１１１２０７、オーシア国防軍中央本部』

極西の飛行隊　後（後書き）

上手くかけていたでしょうか？

戦闘描写が少なく申し訳ありません。

まだ不慣れなものです・・・。

感想があればうれしいです。

Shorebirds（前書き）

今回はまたジュネット視点です。

Shorebirds

国籍不明機の墜落は伏せられた。撃墜したのは空飛ぶ円盤だったという噂さえ流れた。
公式にはまだ世界は平和のうちにある。
最初の空戦を目にした私は島を出ることが出来ない。

夕焼けに照らされる格納庫の一角で二人の男が話し込んでいた。
「譴責(けんせき)なんて珍しくもねえ。いつまで経っても万年大尉さ。」
紅く照らさせた滑走路を眺めながら彼、バートレット大尉はささやいた。
私は近くのベンチに腰を下ろし、静かにその話を聞く。
「戦争を伏せるのは何者でしょうか?。」
「あのな、この海の向こうっていやーユークはムルスカの航空基地っきゃねえんだぜ。」
「ユークトバニアは前の戦争の友好国じゃないですか。」
「だからよ、あっちの中で何が起こってるのか今ごろ釈迦力(しゃかりき)になって確かめようとしてる連中もいる。」
「ホットラインがじゃんじゃかなってるはずだぜ。この国のどこか

では。」

「いたずらに庶民の敵愾心煽(てきがいしんあお)るのが政治の仕事じゃねのさ。」

親密な表情でバートレット大尉は話を進める。

「ただな、軍人の石頭に理想は通じねえ。奴らが口をつぐめと一言いやあこの有様だ。」

「あんたには、すまねえことだけどもよ。」

申し訳なさそうにする大尉。

別に彼の責任ではない。

「いや、あなたたちと居られるからいい。」

「いちばん撃ちたくないのは隊長なんだよ。」

不意に後ろから声を掛けられる。

振り返るとそこにはこの基地の”おやっさん”ことピーター・N・ビーグル整備士がいた。

「隊長にはユークに恋人がいたのさ。」

懐かしむように話すおやっさん。

そんな彼に大尉が答える。

「なあに、古い戦争の傷跡さ。」

そうて彼が向けた視線の先には切り裂かれたハートのAのトランプ。

彼のコールサインであり、そんな彼のエンブレムが儚く夕焼けに彩られていた・・・。

Shorebirds（後書き）

短めですいません。

感想あるとうれしいです。

開戦（前書き）

今回はブレイズです。

開戦

２０１０年９月２７日ブリーフィングルーム

『このサンド島沿岸に、国籍不明の不審船が接近するのをレーダーが捉えた。また、当該船舶から無人偵察機（ＵＡＶ）とみられる物体が射出されたことも確認されている。偵察活動を終えた無人偵察機（ＵＡＶ）は、回収されるために不審船へ戻るものと予想される。回収される前に無人偵察機を捕捉、破壊し、その偵察活動を阻止せよ。なお船舶への攻撃は許可あるまで禁ずる。』

「以上が本日の作戦である。ウォードッグ隊は直ちに発進準備にかかれ。」

基地司令の命令とともにプロジェクターが解除される。
ブリーフィングルームのカーテンが開けられ、外から光が入ってくる。

「さてと、お前たち、今回は無人機が相手だ。苦戦するほどの相手じゃねえ。が、用心にこしたことはねえ。気合いれてけよ。」

それだけ言うと我らが隊長、バートレット大尉はブリーフィングルームを出て行った。

「じゃ、オレらも行きますか?。」

「ああ、さっさと終わらせてしまおう。」

「そうね。」

俺たち新米3人組はそれぞれのロッカールームへ足を運んだ。

――――――――――――――――――――――――――――――――

サンド島上空。

いつもの編隊で飛ぶ俺たちに通信が入る。

《サンダーヘッドよりウォードッグ。情報収集船に戻る無人偵察機あり。回収を許すな。空中で撃ち落とせ。》

《あいよ。聞いたな、野郎ども。》

《エッジ、了解。》

《こちらチョッパー、了解。》

「ブレイズ、了解。」

《よーし、いくぞ。》

４機の編隊がＵＡＶが飛行中の区域へ向かいスロットルを上げていく。

《船には発砲するなとのお達しだ。いいな。》

「問題ありません。」

《そうだ、無人偵察機だけを狙え。ブービー！。お前のお手並みを拝見させてもらうぞ！。》

そんな隊長のお達しに思わず口元が緩む。

いいだろう、お見せするさ。

俺はスロットルをさらに上げる。

編隊最後尾からバレルロールしながら前衛へおどりだす。

後ろから隊長たちの視線を感じる。

ＵＡＶが見えて来た。

ＵＡＶは編隊で飛行しているようだ。

２機編隊２つに４機編隊１つ、合計８機か。

「ブレイズ、交戦。」

俺はまず２機編隊の最後尾を飛行中のＵＡＶ後方に回る。

機関砲のロックを解除。
「ブレイズ、ＦＯＸ３！。」
機体に装備された２０？機関砲Ｍ６１が唸りを上げ火を噴く。
ＵＡＶはあっという間に蜂の巣になった。
そのまま次のＵＡＶに向けミサイルを放つ。
命中したＵＡＶは爆散した。
《ブービー、どうだ。この位なら楽勝だろう？。》
「ええ、問題ありません。」
《ふっ。さっさと片付けるぞ。》
隊長たちもすでに自分たちの獲物に喰らいついている。
《標的射撃でもしてるみたいだぜ。》
余裕を感じさせるダヴェンポート少尉。
そんな彼の獲物にすれ違いざまに機関砲をお見舞いした。
《おい！ブービー、俺の獲物まで横取りするなよ！。》
「おこぼれはだせない。さっさと仕留めることだ。」
《まったく・・・。しかし、人が乗ってないのが救いだな。》
「ああ。」

《おかげで、気兼ねなく墜とせるからな。》

”ドンッ”

機体の爆散音。

隊長とナガセ少尉がそれぞれ撃墜したようだ。

これで残り3機。

《目標は小さい。仕損じるな。》

隊長の激が飛ぶ。

言われなくてもな。

俺は編隊から外れたＵＡＶに接近する。

ダヴェンポート少尉も次の獲物に接近しつつある。

《偵察機の次は無人機ってわけか。妙な避け方しやがる。》

そう言いつつミサイルをお見舞い。

敵機を破壊した。

「だが、所詮無人機だ。」

俺はＵＡＶのエンジン部に機関砲を当てる。

燃料に引火しＵＡＶは鉄くずになった。

もうレーダーにＵＡＶは映っていない。

《警報！国籍不明機多数の接近を探知。》

空中管制機からの無線連絡が入る。

《このあいだと同じ方位か？。》

《方位２８０、同じだ！》

《向こうはどれだけの数を国境にそろえてんだ。こっちはこの４機っきりだぜ。そら、退避しろこっちだ。》

隊長に合わせて退避行動に移る。

《俺のケツについて来れるか？。》

「問題ありません。」

ふりかかるＧを感じながらスロットルを上げていく。

《間に合わねえよ、追いつかれる。》

《今日のどん尻はお前か、ロックンローラー。待ってろ今助けてやる。》

《今日はくじ引きでまけたんだあぁあ！！。》

言うや否や隊長は急旋回を始める。

旋回はただでさえＧを強く感じると言うのにそれをほぼトップスピードの状態から入るとは・・・。

改めて隊長のタフネスさに感心する。

《お前らも見てねえで降りかかる火の粉をさっさと払え。》

「ブレイズ、了解！。」

《エッジ、了解。》

《心配するな。いつもの訓練通りにやればいい。》

そう言いつつ次々と敵機を墜としていく隊長。

《バートレット大尉！！。》

空中管制機から遠吠えが聞こえる。

《隊長の後ろに1機。撃墜します。》

隊長に喰い付いていた敵をナガセ少尉のミサイルが襲う。

《ほいよ。やるじゃねえか。》

《攻撃確認、反撃します。》

ヘッドオンからの攻撃を回避、そのまま敵の後ろにつく。

大した度胸だ。

《エッジ、交戦。》

《ハートブレイク・ワン、交戦。》

《チョッパー、交戦。》

「ブレイズ、交戦。」

《ウォードッグ、交戦許可はまだ出していない！。》

《ブービー、全部墜とすぞ！。》

「了解。」

俺は機体を反転させる。

［［敵部隊、反撃を開始］］

すれ違いざまに２０？弾をお見舞いする。

”ドーン”

《交戦許可無しで撃墜だと？。何を考えているんだウォードッグ！。》

《グッドキル、ブレイズ！。》

「ああ！！。」

体が熱くなる。だが頭は冷静に。

《オレもまけてらんねえぜ。》

ダヴェンポート少尉はそのままミサイルを放つ。

ミサイルは敵機のコックピットに命中。即死である。

《さっきのドローンの仕返しってわけか？。》

少尉は後ろの敵２機を撒きながら無線を飛ばす。

《どこから来たんだ?。このあいだの奴らの仲間か?。》

「方位２８０からの飛来。おそらくな。」

俺はダヴェンポート少尉の後ろにつく2機に向けミサイルを放つ。
1機は炎に包まれ、もう1機は回避した。

「ちっ」

回避した敵が反撃してくる。
敵の２０?弾が機体の近くを通り過ぎていく。

「はぁ、はぁ、はぁ」

操縦桿が重い。少しでも気を抜いたらやられる。

《こっちだ!ブービー!。》

視界に隊長機の姿を捉える。
俺は隊長とのクロスレンジに機体を合わせる。

・・・・・今だ!。

俺は機体ピッチを上げる。
すると機体の船底を隊長が放った弾丸が通り過ぎる。
通り過ぎた弾丸は敵機体に突き刺さった。

”ドン”

「はぁー、はぁー」

何とか俺は呼吸を整える。

《すべての戦闘機の撃墜を確認。》

終わったのか？。

《警報が解除にならない。引き続き対空警戒を怠るな。》

《気をつけろナガセ！。敵は下にもいるぞ！。》

隊長の忠告と同時に敵船舶からＳＡＭが発射される。
ＳＡＭはそのままナガセ少尉の下へ向かっていく。

《！？、くっ！！》

機体を急旋回させるナガセ少尉。
そこに隊長が機体を滑り込ませ、ミサイルの標的を変更させた。

機体をロールさせ、時間を稼ぐもミサイルは隊長機の右翼に命中した。

《隊長！！。》

ナガセ少尉が叫ぶ。
隊長の機体はだんだん高度が下がっていく。

《ばかっ、涙声なんか出すんじゃねえ。ちょっくらベイルアウトするだけだ。機体なんざ消耗品。搭乗員が生還すりゃ大勝利だ。救難

ヘリと俺の予備機の整備の手配、頼んだぜ。≫

”パシュッ”

煙を上げる機体からパイロットが射出される。

「こちらブレイズ、パラシュートの開散を確認。」

≪警報！警報！、ウォードッグ全機、至急基地に帰還！≫

≪救助ヘリの到着がまだです。≫

≪救助隊に任せろ！。基地で燃料弾薬を補充して再発進！。敵は宣戦布告した。≫

≪何だって！？≫

宣戦布告？。また戦争が始まるのか・・・。

「ブレイズ、了解。」

≪ブレイズ！。≫

≪おい！ブービー！。≫

「隊長なら大丈夫だ。あの人のタフさ。俺たちが一番よく知っている。今は俺たちに出来ることをやろう。」

≪・・・ＯＫ、わかったよ。チョッパー、了解。≫

≪・・・エッジ、了解。≫

俺達は次の作戦行動のため基地への帰還を開始した。
出撃前と違い、３機の編隊となって・・・。

『無人偵察機および武力行使をした国籍不明機は撃墜された。
国籍不明の不審船は領海域から離脱、偵察活動は阻止された。
作戦中に撃墜されたバートレット大尉の捜索は、周辺海域の安全の確認を行い次第開始する。
なお、ユークトバニア連邦共和国は、我がオーシア連邦に対する宣戦布告を行った。』

開戦（後書き）

この回はナガセ視点で書いてみたかんですが、やはりブレイズにしました。
このころからリーダーシップを発揮させていた感じにしたかったからです。

感想あるとうれしいです。

Narrow margin（前書き）

今回はジュネット視点です。

Narrow margin

広さおよそ8畳の二人部屋。窓のそばには2段ベッドとソファー。入口近くにはPC備え付けのデスクと小物棚が宛がわれている。

ここは私が軍に用意された部屋。

または牢獄。

牢獄と言ってもどこぞの囚人のような扱いを受けているワケではないのだが。

―――――――――――――――――――――――――――――――

［搭乗員宿舎　9月27日　12時05分］

現在、私の部屋には電話をしている人物がいる。

ハミルトン大尉。

私を閉じ込めた基地司令官の副官にしては話の出来る男だ。
私のカメラも彼が取り返してくれた。
伯父が軍人でなかったら私のような職業に就きたかったといって。
今は電話が終わり何やら考え事をしている。
「たった今、あなたを閉じ込めてた理由がなくなったよ。」
「えっ？」
「ユークトバニアが宣戦布告した。宣戦同時攻撃だ。セント・ヒューレット軍港が空襲を受けている。」
彼はそう私に伝えると足早に部屋を出て行った。
窓の外から戦闘機のエンジン音が聞こえる。
ブラインドのむこうの滑走路には離陸していく彼らの姿が見えた。
「彼らは3機しかいない？。」
飛び立つ【Ｆ－５Ｅ】の機影を見ながら私は思わず呟いた。

Narrow margin（後書き）

短めですいません。

次回はいよいよ本格的な開戦です。

感想があるとうれしいです。

間隙の第一波　前篇（前書き）

今回はエッジ視点です。

間隙の第一波　前篇

私たちはあの後補給を済ませたのち、すぐさま離陸した。
ブリーフィングは移動中に行うとの通達のみでまだ詳しい話は聞かされてない。

本音を言えば私はすぐにでも隊長の下へ向かいたかった。
でもそれは出来ない。私たちは軍人であり、公私を混合させてはいけない。

あの時、ブレイズは私たちに言った「隊長を信じろ」って。
だから私は今私に出来ることをやり遂げる。

”ピピピッ”
《緊急事態につき。この時間で戦況を説明する。》

『ユークトバニア航空部隊による奇襲攻撃を受けていると、セント・ヒューレット軍港から入電があった。現在港全体は極度の混乱状態にある。港にはオーシア第3艦隊の艦艇が停泊中であり、敵の攻撃にさらされている。セント・ヒューレット軍港に急行し、艦艇の湾外への脱出を支援せよ。なお第3艦隊の中核を成す空母ケストレルだけは必ず守り抜け。』

《以上が作戦内容だ。全機健闘を祈る。》

本部からの伝達が終了した。これから私たちはセント・ヒューレット軍港へ急行する。

《サンダーヘッドよりウォードッグ。エッジ、編隊の指揮を執れ。》
違う指揮を執るべきは私ではない。
「いいえ。ブレイズ、前に立って私は後につく。」
《ナガセ少尉、命令に従え。》
「いいえ。指揮はブレイズが。私は後ろを守る。」
そう。
「もう1番機を落とさせはしない。」
これは私の決意。
あの時あまかった私に対するケジメ。
《ナガセ少尉・・・。》
「大丈夫ブレイズ。貴方なら出来る。私は貴方の指示に従う。」
《オレもだブービー。お前に任せるぜ。》
《了解した。サンダーヘッド。ここは俺が指揮する。》
《こちらサンダーヘッド。了解した。》
《うろうろしてるな！ここは戦場だ！。そこらじゅうにいる敵に喰われるぞ！。》

無線と同時に１機の【Ｆ－１４Ａ】が高速で通り過ぎて行った。
あれは・・・ケストレルの艦載機？。
《ひえーぃ。俺はどん尻でいいよ。》

そうしている内に軍港が見えて来た。
《こちらソーズマン。スノー大尉だ。次の敵編隊を迎撃する。位置を知らせよ。》
《こちら対空艦エクスキャリバー。前方をふさぐ艦。離れてくれ！。ＳＰＹレーダーが照射できない！。》

《こちらウォードッグ。交戦区域に入った。》
《ウォードッグ。交戦を許可する。》
ついに戦闘が始まる。
いつも軽口をたたく隊長は今はいない。
《ブレイズ、交戦。》
「エッジ、交戦。」
《チョッパー、交戦。》
３機の編隊は軍港へ向けて機体を傾ける。

「私が後ろを守る。いいわね、ブレイズ？。」

《了解した。後ろを頼む。》

「ええ。」

私たちは対艦ミサイルを搭載した機体に対して攻撃を開始する。

《ブレイズ、”ＦＯＸ２”。》

ブレイズのミサイルは敵の【Ａ－６Ｅ】に向かい命中。敵機はそのまま湾内に墜落して行った。

《隣の給油艦が爆発した！消火艇はどこだ？本艦に燃え移る！助けてくれ！。》

《何故侵入に気付かなかったんだ？》

情報通り湾内はかなり混乱している様子。

「エッジ、”ＦＯＸ２”！。」

私は対空艦を狙っていた敵機に向けミサイルを放つ。

「ミサイルの命中を確認。」

そのまま次のターゲットを探す。

［［停泊艦ばかりだ、まるで演習だな。］］

［［敵の増援部隊を確認。警戒しろ。］］

《隊長。指示はいつでもオーケーだぜ。》
《そうか。ならばこれより分散して敵の各個撃破にあたる。全機ブレイク！。》
「エッジ、了解。」
《チョッパー、了解。》

ブレイズの指示に従い私は対艦機の護衛戦闘機に狙いを定める。
・・・・今！。
”ブオオオオ”
機関砲の唸りとともに敵機から火が上がる。
《消火艇が爆発に巻き込まれたぞ。2隻・・・いや3隻…燃えてるぞ！。》
《これは演習ではないんだぞ！。》
《見りゃ分かんだろ！ばかやろー！！。》
［［目標は敵空母及び随伴する大型艦艇。湾外への脱出を許すな。すべて仕留めろ。］］
《ケストレルを守れ！。》
《今こそ盾（イージス）の役割を果たす。》
敵の爆撃が緩む気配は見られない。
「ブレイズ、こちらエッジ。空母ケストレルを確認できますか？。」
《ああ、捕捉している。》

機体を傾ける。港には多少の被弾が見られるものの健在な空母の姿が見える。

「こちらからも捕捉できました。まだ大丈夫のよう。」

３機目の敵機に機関砲を浴びせる。

被弾した敵機は燃料をばら撒きながら海面へと突っ込んでいった。

「湾全体が炎の中に。」

海面に浮かぶ燃料に引火したのか、湾が燃えている。

《なんだ、この損害は?。オレ様の想像力を上回るとは、どうなってんだ。》

後ろから来る敵機の攻撃を躱しながら反撃の機会を伺う。

《こちらは空母ケストレル。港口へ向かう。》

《了解、ケストレル。ケストレルの脱出を優先しろ!。そこの艇!気持ちはわかるが道を開けろ!空母は貴重品なんだ!。》

《上空よりミサイル着弾１１時方向、距離２００ｍ》

敵のミサイルをフレアで回避。

そのまま急旋回して相手の後方に回る。

「”ＦＯＸ２”!!」

”ドゴン”

「敵機撃破。」

《グッドキル。》
《ヒュー。やるねー。》
《ケストレル出港完了！いい航海を！。》
「ブレイズ。ケストレルが出港したわ。」
《確認した。》
大型空母ケストレルが湾外へ向けて動き出す。
《上空の味方戦闘機、ケストレルを守ってやってくれ！。》
《こちらソーズマン。今、向かう俺たちの艦だ。》
《駄目だ。こちらサンダーヘッド。空中管制機指揮官だ。ソーズマンは東セクターに留まれ。持ち場を守り戦闘を続行せよ。》
《あれは俺の母艦なんだ！。》
《ウォードッグ。ケストレルの直衛につけ。》
《石頭ヤローめ！任せたぞウォードッグ。俺たちの母艦を。》
《こちらブレイズ。了解した。全機ケストレルを守るぞ。》
「エッジ、了解。」
《チョッパー、了解。》

レーダーにケストレルに向かう敵影を捕捉する。
「ブレイズ！。」
《下だ！。大橋の下からくるぞ！！。》
湾口の橋の下から低空侵入を試みる敵機。
すぐさま私たちは高度を下げる。
《ケストレル湾口まで３マイル。》
［［Ａ隊は敵艦艇へ、Ｂ隊は港湾施設を破壊、Ｃ隊は上空制圧だ。］］
《敵対艦ミサイル発射、ファランクス撃ち方始め！。》
《衝撃に備えろ！。来るぞ！。》
空母を狙う敵は２機。
《エッジ！。右の奴を頼む。》
「了解。ブレイズ。」
《チョッパー。上空の奴らを。》
《あいよ！。隊長。》
私とブレイズは海面スレスレまで高度を下げる。
射程圏内までもう少し・・・。
”ピー”
はいった！。
「エッジ、”ＦＯＸ２”。」

《ブレイズ、”ＦＯＸ２”。》

機体から短距離ミサイルが発射される。

”ボーン”、”ドンッ”

私たちはピッチを上げ、高度をとる。

《敵機の撃破を確認。ギリギリだったな。》

「ええ、何とか間に合った。」

空母への損害は軽微。このまま湾を抜ければ・・・・。

！？

ふと海面に視線を向けた私の目に移ったもの。

それは・・・。

「あの波間に浮いているのは・・・人？。」

後編へ続く・・・・。

間隙の第一波　前篇（後書き）

うまく書けたでしょうか？。

感想あるとうれしいです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1384ba/

ACE COMBAT 5 The Unsung War

2012年1月6日10時47分発行